

# 「見られるなむじま」 「見かけるなむじま」

井口 眞美

当然のことながら、「見る」という行動は、「見る」対象を伴います。保育においては、その対象として子どもがいるわけです。

ところが、残念ながら、子どもを一生懸命「見ている」つもりでも、その一生懸命さが裏目に出ってしまったら、「こうあってほしい」といった一方的な価値観だけで子どもを「見て」しまい、対

象であるはずの子どもの気持ちを置いてきぼりにしたりすることがあるのです。

## 見られる子ども

子どもたちが遊んでいる様子を、少し離れた場所から、笑みをたたえながらじっと見守る保育者……その視線の先には、友達と楽しくあそぶ子ども

もの姿があります。

こんな時の保育者の視線は温かく、子どももその“温かい温度”を感じ取りながら安心して遊びを進めていることでしょう。

しかし、時に、私が出しゃばって手出し口出ししたくはないが、ちよつと様子は見守りたいなど感じる場面があります。例えば、友達と一緒に遊んでいるものの何となく不穏なムードが漂っているAちゃんたち、メンバー同士の友達関係がまだ不安定なために遊びが途絶えてしまうかもしれないBちゃんたち、友達と口喧嘩をしてしまい「一人で遊ぶからいいの」と所在なげに絵を描いているCちゃん、等々の姿です。

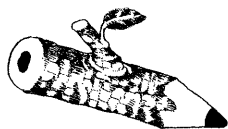
こんな時、気がつかないうちに私は、不安そうに“温度の低い”視線を子どもたちを送っているに違いありません。すると、子どももその視線が気になり、ちらちら私の方を見たり、遊びが盛り上がらなくなったりするものなのです。

そこで、“温度の低い”視線を送らなければならない時は、子どもをダイレクトに見つめるのではなく、見ていないふりをして、子どもに“温度の低さ”を感じ取らせないように心がけてみましょう。

気になるAちゃんたちにあえて背を向け、散らかっている遊具棚の整理をしながらAちゃんたちの会話を背中で聞いたり、隣のグループの遊びに加わりながら横目でAちゃんたちの様子をそつとうかがったり……、とまるでスパイまがいの行動をとってみるのです。

子どもの姿を細かく見とることは保育者としての基本です。

しかし、保育者として未熟な私などは、「細かく見とりたい」との思いが全面に出過ぎてしまい失敗した経験が数



知れず。「好きな相手を追えば逃げる」という恋  
愛指南ではないですが、保育における「見る」と  
いう行動一つをとってみても、こちらの思いが強  
ければ強いほど、「見られる」子どもの立場をふ  
まえ、その表現の仕方にはよくよく注意を払わな  
ければいけないと実感しています。

### 見せる子ども

鉄棒で前回りが初めてできるようになった日、  
子どもは「先生、見て、見て」と、保育者の手を  
強く引つ張って鉄棒に連れていき、前回りをして  
見せてくれます。前回りができた感動や頑張った  
達成感を保育者と一緒に分かち合うことで、子ど  
もの喜びは二倍になります。「見せる喜び」を味  
わった子どもとそれに共感する保育者は、ほのぼ  
のとしたひとときを過ごすことでしよう。

私の幼稚園では、学期末や年度末に、今までの  
生活のまとめとして、五歳児が四歳児や保護者を

招いて劇などの活動をして「見せる」ことがあり  
ます。五歳児ともなれば、四歳児に自分たちの劇  
を見てほしい、お母さん方に劇を見せたいと思っ  
て、気持ち自然に生まれてくるものでしょうし、そ  
れをきっかけにして発表の場をもつことは、五歳  
児にとって貴重な経験になると思います。

ここまではいいのですが、この「見せる」活動  
がなかなかくせ者でして、とりわけ、保護者に  
「見せる」となると、(要らぬ)教師根性がむく  
むくと首をもたげることがあるのです。

「自分がなりきる楽しさ」を大切にしつつ、他  
者に見せる喜びを併せ持った活動(劇など)を  
展開させていくためには、発表の時期や活動の内  
容、進め方について十分な配慮が必要です。そう  
でない、せっかくの活動も、子どもの主体性が  
そがれたお仕着せの活動になってしまいます。

私は、かつてこんな失敗をしたことがあります。  
す。

ある学年の一学期、私の担任する五歳児クラスでは、お姫様、妖精、ポケモン等、思い思いのものになりきって遊ぶ日々が続いており、次第に劇場ごっこなるものも生まれてきました。それは「自分がなりきる楽しさ」だけでなく、「他者に見せる喜び」をも味わいたいとの思いの自然な表れでした。

その後、子どもたちとの話し合いで、保護者を招いてクラスで劇をすることに決まりました。

しかし、劇の練習をしていくうちに、「せっかく保護者の方々に見せるのだから、見場もよくしたい」との私の思いが、「見せる」ことを強く意識した劇の指導へと形を変えていってしまったのです。

イヌになりきって動き回っている子に向かって「お客さんに、お顔を見せようよ」と言ったり、泥棒を捕まえようと走り回る子に「そんなに騒いじゃ劇にならないわよ」と注意してしまったり

……そこには保護者が子どもを「見る」目（＝おとなの一方的な価値観）を意識し過ぎ、見場をよくすることに気をとられていた私がいまいました。いつの間にか、子どもが「なりきる楽しさ」を隅へ追いやり、子どもの「見せたい」との当初の思いを削いでしまったのではないかと深く反省しています。

\*

子どもは、おとなたちの視線を敏感に感じ取るものです。そして同時に、おとなたちが自分をどう見ているかについてもまた、敏感にかき分けてしまいます。

子どもの気持ちを考えず、一方的な期待や評価で子どもを見てしまうと、子どもはおとなの枠組みでがんじがらめになってしまう可能性があることを忘れずに保育をしたいと考えています。

（東京学芸大学教育学部附属幼稚園竹早園舎）